

Title	アダム、スミスと独逸の経済学
Sub Title	
Author	エルンスト, グリューンフェルト
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.3 (1911. 4) ,p.328(118)- 334(124)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	アダムスミス記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110415-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミスと獨逸の經濟學

エルンスト・グリユーンフェルト

余はアダム・スミスが獨逸の經濟學に及ぼしたる影響を明らかにせんが爲めに、先づスミスの理論が獨逸の經濟政策に如何なる影響を及ぼしたる哉を敘し、而して後に最近百年間に於ける獨逸經濟學の發達を述べてスミスの學説が如何に重要な地位を占めたるやを明らかにせんを欲す。

スミスの自由貿易主義は佛蘭西を通じて獨逸に輸入せられ、那翁戦争後大に行はるゝに至り、特に普國の大臣シタインの如きも之に賛成し、以て一八一八年には關稅法を發布して内國關稅を廢し、一國內の各地方をして恰も獨立國の如き事を行ふの弊を除きたり、而して一八三四年には所謂ツオルフェライン(獨逸關稅同盟)を組織し、之は一八六七年迄繼續し、以て自由貿易主義を行ひたり、而して此スミスに依りて唱道されたる經濟主義は十九世紀の末葉迄行はれたれ共、ビスマルクの宰相となるや一八七九年より漸次衰微の傾向を呈せり、即ち商業の方面に於て

は必ずしも自由貿易主義行はれず、又工業の方面に於ても必ずしも自由放任主義行はれざるに至れるなり、然れども那翁戦争後普國が其經濟狀態を回復せんとするに當たりては、一はスミス主義の流行と他は實際上の必要とより常に自由放任主義を探り、特に一八五九年の産業法の如きはよく此主義を代表するものと云ふ可し、然れども此主義は永遠に獨逸の産業界を支配する事能はず、十九世紀の末葉に至りては遂に顧みる者なきの運命に遭遇せり、而してシモラーの如きは此スミス主義の消滅を以て實際上の必要より來たれるものと云ひ居れり。

スミス主義が獨逸の經濟政策に及ぼしたる影響は右の如しとして、其學説に及ぼせる影響は如何と云ふに、スミスの學説が輸入さるゝ以前に當たりて獨逸には官房學なるものありて、官房即ち大藏省の如き官廳の吏員に必要な學術を研究せしが、其主義より云へば重商主義、重農主義等に傾きたり、然るに其後スミス主義入り來りて速かに傳播せしが、有力なる學者中之に反對する者も少なからざりき、而して先づ其賛成者を擧ぐれば最も有力なる者はラウにして、彼は一八二六—

ルマンの如き或は農場主にして經濟學者なるチューネンの如きは皆此主義を奉ずる者なり、而して此主義は獨逸を経て遂に露國に迄輸入せらるゝに至れるなり、扱て翻りて其反對者を紹介せんに最も有名なる者は二人あり、一はアダム ミューラーにして彼は特にスミスの個人主義に反對し之を以て社會の構成に有害なるものとせり、而して他はフリードリッヒ リストにして、彼は政策の熱心なる研究者なりしかば、實際上の見地より其極端なる自由貿易主義に反對せり。

スミス主義は英佛の兩國に於て最もよく行はれしも獨逸に於ては先きに述べたるが如く大なる反對に遭遇せり、之れスミスは其主義を構成するに當たりて獨逸の事情を顧みず、特に歴史上の事實には全體重きを置かざるの傾向ありたればなり、而して此時代にはまだ歴史學の研究不十分なりしかば多少スミス主義に反對する者ありしも、而も尙之に代はる程の主義を提出する者はあざりき。然るに獨逸及び瑞西に於ては大に之に反對する者を生じ、其自由放任の如きは只富者の利益とのみなる可きものにして、労働者の如きは却て之が爲めに大なる困窮に陥る可しとなし、特に社會主義者の如きは此反對説を探るに至れり、此の如くにして

獨逸に於てはスミスの學説には充分の敬意を表しつゝ、而も尙之れに反對する者少なからざりしなり。

此の如くスミス主義の反對者は所々に之を見出す事を得可しと雖も、其之に代はる可き系統ある學説を提出したる者は歴史派の經濟學者なり、而して此學派の特色は如何と云ふに、國民經濟の狀態なるものは歴史の産物にして時に依りて大に異なる可きものなるが故に、古今に通じて可なる政策は存在す可からず、又スミスの所謂自然法の如きも全然存在せざる所にして、特に經濟生活なるものは社會生活の一部に過ぎざるが故に之を分離して研究するが如きは頗る不可なりと稱せり、此の如くにして此學派は新たななる研究法を發表し又經濟現象に新たななる説明を與へたるの功績は没す可からずと雖も、亦決して缺點なしと云ふ可からず、即ち英佛學者の特長なる抽象的演繹的方面を忘却し以て理論的研究に重きを置かざりしなり。

尤も既に佛國にてはオーギュスト コントありて歴史的研究法を唱道したりしも、獨逸に於ける歴史派の勃興はコントの影響を蒙りて生ぜるにはあらず、實

に百年以來歴史學等の隆盛となれる結果として起これるものにして、又哲學說の變化も此新研究法の發生に與かりて力ありしなり。

歴史派の元祖はウイールヘルム、ロツンヤーにして彼は一八四三年に經濟學四卷を公にし、第一卷原論、第二卷農業編、第三卷商工編、第四卷財政學とせり、而して經濟學の一部として農業を論じたるが如きはマンチエスター學派が商工業のみを論じたるに比して大なる進歩なりと云ふ可きなり、特に彼は經濟學を論ずるに當たりて只に物質的方面のみならず、倫理的方面に重きを置きたるは大に注目し、價値の下には人は只に食物のみに依りて生活する者にあらず、又精神的の要求を有する者なる事を記せり。

歴史派に屬す可き者はロツンヤーの外に古人にてはヒルデブランド、クニース等あり、又若手としてはシモラー、ナツセ、コンラート、シエーシベルヒ、レクシス、コーン、ヘルト、ブレンタノ、ワグナー等あり、此等諸氏の特徴は實に倫理的方面を重要視し、或は國家の活動を要求し、又は經濟と法律との關係に重き

を置きたるにありと云ふ可し。

尙ビユーヒヤー、フイリツポヴィツチ或は嘗て日本に在りたるレイスラー、テートゲンの如き、又は現今東京帝國大學に在るヴェンチツヒの如きも之に屬する者と云ふ可し、而して尙歴史學派に關連して述ぶ可きは一八七二年に創立されたる社會政策學會にして、之は此學派の中心點となり、其多大なる出版物に依りて經濟立法に影響を及ぼしたる事亦些少にあらざるなり。

歴史派の外に尙一小派あり、之は奧太利學派又は維納學派として知らるゝものにして、其代表者はメンガー、ヴァーザー、ベームバヴァーク等なり、而して此學派の特徴は歴史派に反して嘗て英佛學者の唱道したる抽象的演繹的研究を再興したる事にして、先きに歴史派の下に述べたるフイリツポヴィツチの如きも亦理論の方面に於ては此派に屬するものと云ふ事を得可し。

尙此外に存する一學派はマルクスの社會主義を奉ずる者にして、此學說は資本論三卷に依りて公表せられ、價值論物質的史觀論等に於て特色を顯らはせり、而して當今の學者中此派に屬する者少なからず、ゾムバルト、アルフレート及びマツク

124

スヴェーバーの如きは其最も有名なる者なり。

以上述べたる如く最近の百年間は經濟學の發達に最も重要な時代にして、アダムのスミスの經濟學は獨逸經濟學の發達を助成したると同時に、又獨逸に於て其偏頗なる演繹的研究法は歴史派に依りて訂正され、又其個人主義はシタイン等に依りて改良され、且つ極端なる自由貿易主義の如きも其缺點を發見され、溫和なる保護主義の代はる所となれり、而して此の如きスミス主義の改良は皆獨逸に於て生じたるなり。

アダム、スミス研究書目

(一) 一般經濟學史的論述

英語

Bonar, Philosophy & Pol. Eco., 1893, bk. 3. Ch. 8.

Buckle, History of Civilization in England, II p.432-457.

Cannan, A History of the Theories of Production & Distribution in English Pol. Eco. 1776-1848, 1894, P. 407-408.

Ingram, History of Pol. Eco. 1888, P. 87-110.

Price, A short History of Pol. Eco. in England from A. Smith to Arnold Toymbee, 1891, P. 1-34.

Seligman, The Shifting and Incidence of Taxation, 2nd. ed., 1899, P. 113-117.

Tawiss, A View of the Progress of Pol. Eco. in Europe, 1847, P. 159-194.

125

佛語

アダム、スミス研究書目

三三五